

それぞれの人を乗せて走った軽便列車

あるときは通学のため

またあるときは仕事や娯楽のため

それは、生活の足として

その列車はゆっくりと

ときの流れの中を進んでいた

時代が風雲急を告げるとき

桜の花も散ろうとしている

戦争とともに生まれ

戦争とともに消えてゆくと

「軽便」は、幻になった……

夢は永遠の眠りの中に

〔路線廃止〕

花の軽便鉄道が全盛を極めた昭和6年以降、ときの流れは軍国主義による、戦争の時代へ向かおうとしていました。富里の地からも、多くの若者が徴兵され、軽便列車は彼らを戦地へと赴かせて行ったのです。

戦争の余波は更に昭和14年ころ、富里村の実際の口から四区、八街町朝日区にかけて、陸軍の飛行場が建設されることになり、軽便鉄道八街支線はその建設予定地を横切るとして、路線の廃止が決定しました。本線は昭和19年1月10日に「不用不休の鉄道」として全路線が廃止。

ここに明治43年以來、軽便鉄道34年の歴史に幕が閉じられました。

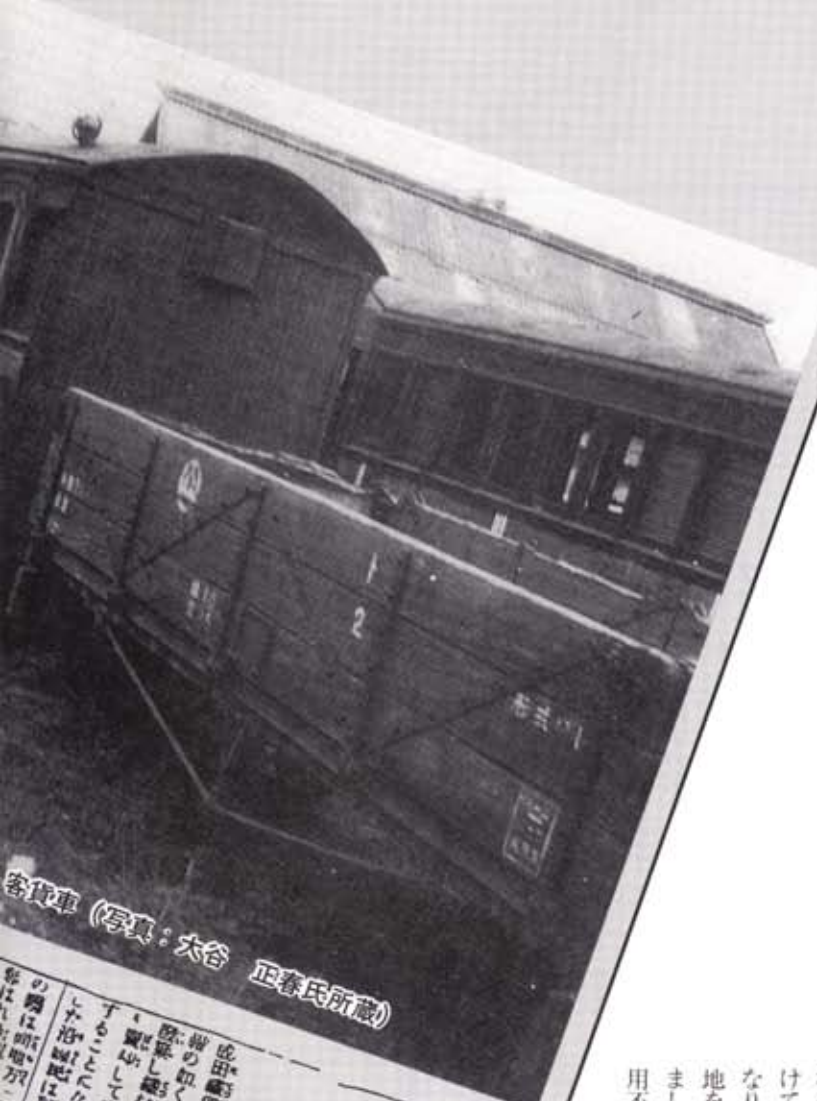
戦時下で物資供出の時代、徴収された車両やレールは、産業設備営団に買取られ、東インドセラベス島（現インドネシア・スラウエシ）のニッケル鉱山の採掘に用いられたとも、その輸送中に台湾沖で、船もろとも撃沈されたとも言われていますが、事実は定かではありません。

また、強権発動による路線の廃止は、沿線住民による路線存続の陳情や、戦後には路線復活の話も持ち上がったとされていますが、ついに夢は永遠の眠りの中に閉ざされたのでした。



陸軍八街飛行場(写真：丸山 房夫氏所蔵)

昭和16年4月から終戦まで使用され、約1,500人が従軍。主にサイパンの偵察を任務としていた。写真の機体は100式指令部偵察機2型で、尾翼が上がっているのは、終戦後その使用をGHQから禁止されたため。



客貨車 (写真：大谷 正春氏所蔵)

八街、三里塚間 成鐵存続を陳情 沿線五ヶ町村が縣會へ

千葉毎日新聞(昭和14年3月30日)

沿線住民の陳情が、成鐵の存続を求め、沿線五ヶ町村が縣會へ陳情書を提出した。沿線住民は、成鐵の存続を求め、沿線五ヶ町村が縣會へ陳情書を提出した。

そして、思い出は今も心の中で

【エピソード 軽便追想】

遠くで豆つぶほどに見えた列車が、やっとホームに到着した。列車は思ったよりも混んでいないようだ。

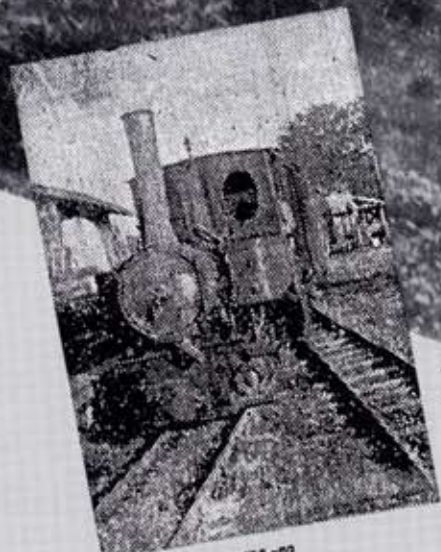
駅の待合室では、ちらほらと切符を買う人の姿が見られるようになった。駅長の斉藤さんは、売り上げ台帳に筆を運んでいる。大きなふろしき包みを持った数人の男女が列車に乗りうつしている。

「そろそろ出発か・・・」

「こんなちっぽけな軽便列車だけど、50年後、100年後も走っているのだろうか。もしかしたら、本線くらい線路も広くなっていたりして・・・」

先ほどから、待合室に座っていた男が

成田鉄道八街支線



代を築き、たに治し、遺に深甚の朝意を遺しつゝありたり。一度鎌倉に本願寺の提出せらるゝや、治民は棄したる處、本願寺の遺跡をな山に決定せり。

陳情書
成田鐵道株式會社御意八街三
血縁的親戚は、成田鐵道株式會社御意八街三
から、よやうに以て、
實ならんか、
及び、

汽笛一聲姿消す 成田鐵道の一部、バスに改装

朝日新聞千葉版（昭和14年9月28日）

成田鐵道の一部、バスに改装

汽笛一聲姿消す

成田鐵道株式會社御意八街三
から、よやうに以て、
實ならんか、
及び、

朝日新聞千葉版（昭和14年9月28日）

ベンチからさつと立ち上がる。

列車は、ゆつくりと動き出していた。

※ ※ ※

軽便鐵道を最後に管理していた成田鐵道は、のちに成田バスから千葉交通株式會社に社名を変更し、軽便路線の一部は、現在、バス路線に変わっています。

年月の経過とともに、軽便鐵道という幻の列車の存在も、記憶のかたに消え去ろうとしており、両国・実の口地区にお住まいで、当時を知る人もだいたい少なくなりました。

「軽便が走っていたころは、両国や実の口ももっと栄えていたな」「南部地域は1時間にバスが1本で不便、やはり鐵道

は欲しい」「軽便があれば」

取材を通じて、みなさんが口々に言っていたことに、懐かしさと同じくらい、交通の利便性を訴える言葉がありました。そして現在、84年前に軽便鐵道が走っていた当時とは、時代が大きく変化しており、町の風景も大きく変わった所や、また、当時のままの良さが残されている所も見られます。

村を走っていた軽便列車が、今となってはどのような意味を持つのかは、人それぞれの思いによりますが、村の歴史の一幕を築いたこの列車は、今でも軽便を知る人々の心の中に、走り続けているのではないのでしょうか。

